

| | |
|-----------------|--|
| 研究課題 | 安静時正常血圧者における運動負荷時過剰血圧上昇の意義、治療介入についての検討 |
| 支援番号 | GC00120122 |
| 研究事業期間 | 平成24年6月1日から平成26年3月31日 |
| 助成金総額 | 1,200,000円 |
| 研究代表者 (所属機関) | 伊藤正洋(新潟県健康づくり・スポーツ医科学センター) |
| 研究分担者 (所属機関) | 小玉誠(小玉医院)、鈴木利哉(新潟大学医学部医学科)、田邊直仁(新潟県立大学人間生活学部)、齋藤麻里子(健康づくり・スポーツ医科学センター)、田中典子(健康づくり・スポーツ医科学センター)、荒川正昭(健康づくり・スポーツ医科学センター) |
| 研究キーワード | 高血圧、運動負荷、生活習慣病 |
| 研究実績 の概要 | <p>安静時血圧は正常であるにもかかわらず、運動によって過剰な血圧上昇を示す方がいる。このような方々は、将来の高血圧発症率が高いことが報告されている。一方で、運動時過剰血圧反応の統一した基準はなく、さらにこのような方は見つかった時点ですでに臓器障害を有しているのか、治療介入を考慮すべきか、その場合運動時血圧がいくつ以上で治療が必要か、どのような治療法が最適か、など疑問な点が多い。これらを明らかにすることが本研究の目的である。近年、運動習慣者は増加している(平成22年度:男性34.8%、女性28.5%。厚生労働省ホームページ)。新潟市は地域に密着したプロスポーツの存在もあり、運動を中心とした健康づくりが進めやすい環境にあると考えられ、運動を安全に行うためのみならず、その効果をより有益なものとするためにも、本研究は重要である。</p> <p>健康づくりスポーツ医科学センターでは、健康づくり支援として<生活習慣改善コース>を開催し、血液、尿、心電図検査等に加え、3ヶ月のコース開始時と終了時に、自転車エルゴメータ運動負荷試験を行い、運動時血圧反応も記録している。平成24,25年度に助成をいただき、検査機器購入、データベース構築、解析に必要な機器、ソフトをそろえ、<安静時正常血圧者における運動負荷時の血圧反応>について検討を行ってきた。その結果、1. 安静時非高血圧者(安静時収縮期血圧(SBP)<140mmHgかつ拡張期血圧(DBP)<90mmHg)の40%が自転車エルゴメータ運動負荷により過剰血圧反応(今回は、男性で運動時中にSBP210mmHg以上、女性で190mmHg以上を示した場合過剰反応あり、と定義した。)を示す、2. 安静時非高血圧者の中でも、安静時至適血圧群(安静時SBP<120mmHgかつDBP<80mmHg)に比し、安静時正常高値血圧群(安静時SBP130-139mmHgかつ/またはDBP85-89mmHg)は、運動時過剰血圧反応を呈しやすい、3. 男性と女性で過剰血圧反応に寄与する因子が異なる、4. 腎臓器障害と運動時過剰血圧反応の有無の間には、横断的検討では関連を認めない、5. センターの指導する<生活習慣改善コース>を基本としたトレーニングにより、運動時過剰血圧反応は有意に改善する、ことを見出した。</p> <p>今後、1. 運動時過剰血圧反応群の長期経過観察、2. トレーニングによる血圧反応改善の機序、3. トレーニング効果がある群とない群の違い、4. トレーニング効果は一時的なものか、持続するか、5. 運動時血圧反応と日々の活動性、一日血圧との関連、などの検討を加え上記の疑問点を解明したい。</p> |